

松本平と長野県における動詞否定形

— -ネー、-ンを軸に—

上 條 厚

キーワード：-ナイ（-ネー）、-ン、境界線、方言形、使用率

要旨

動詞の否定形は、松本平ではもともとヨマネーのように -ネーを使うが、現在、ヨマンのように -ンを使うことがある。高年層に対する調査によると、-ンはそれほど多く使うわけではなく、またカモシレンのような常套句や特定の動詞に片寄って使う傾向があるようである。普段の会話で使われる否定形全般では、男性は方言形が優勢、女性は共通語形が優勢というはっきりした結果が見られたが、-ナンデ（共通語の -ナクテ、-ナイデに相当）のように、女性も方言形を多く使うものがある。長野県内の若年層に対する数量調査では、ヨマン、ミンの使用に関して、地域によるはっきりとした違いが見られた。松本市でのヨマン、ミンの使用は県全体では低率の方であるが、松本市の周辺よりは高率である。

1. はじめに

用言の否定形である -ナイは、方言形として -ネー（例えば、ヨマネー）が広く行われており、松本平方言においても -ネーが旧来の言い方であるが、-ネーには方言独特の活用体系がある。それらの使用状況は、地域言語の共通語化の波の中、現在どうなっているであろうか。

否定形である -ナイと -ン（ヌ）の対立（例えば、ヨマナイ—ヨマン（ヨマヌ））は、東西両方言の特徴としてよく知られているが、牛山（1969）によるとその境界線は長野県の中央を東西に横切っており、北は -ナイ、南は -ンである。松本平は -ナイ（-ネー）の地域である。しかし近年、これは筆者の主観であるが、松本地方で -ンをよく耳にするようになった。それは単なる主観であるのか、実際に広まっているのか。-ンは松本地方で、また長野県全体として、実際どのような使用状況にあるか。また否定の過去形である -ナンダはどうか。

以上のことを見ることにする。なお本稿では動詞についての否定形のみを扱う。表記は、ラテン文字による音韻表記とカタカナ表記を適宜使う。また以下で扱う市町村の区画は、2002年時点のものである。

2. -ナイと -ンの境界

牛山(1969)は -ナイと -んの境界について書いている。混用の地域もあることを断った上で、「このない、ん(ぬ)両系の境界線を設定するならば」として続けて述べているが、同書から長野県内における境界を示している部分を抜き出すと、「南安曇、東筑摩、諏訪の西境を経て」となっている(いずれも4ページ。注)。その郡境が境界だということである。その内、南安曇郡の中で南端の奈川村は -ンであるので(馬瀬1992など)、それを考え合わせて、またことばを変えて境界を示し直すと次のようになる。長野県内における境界線は、安曇村と奈川村との村境、旧東筑摩郡と木曾郡との郡境、旧東筑摩郡と上伊那郡との郡境、旧諏訪郡と上伊那郡との郡境、これらを結ぶ線であり、この線の北が -ナイ(-ネー)、南が -ン(-ヌ)である。(43ページの地図参照)

国立国語研究所(1991)は全国的に方言文法を調査したものであるが、動詞の否定形は「起きない」を始めとして、13の動詞について調査結果を示している。その調査の対象者は調査時(1979年~81年)に60歳~75歳が望ましいとしており、長野県内では28の地点で調査を行っている。その結果と上記の境界線とを比べてみると、次のとおりである。国立国語研究所(1991)の調査地点で境界線の南側にある地点の内、調査地点の中では境界線に最も近い上伊那郡辰野町の地点と上伊那南箕輪村の地点が -ネーとなっている。それ以外は(混用もあるが)上記の境界線と一致した結果となっている。

以上、上記の境界線が基本的に -ナイ(-ネー)と -ンを分けるものであることを確認した上で、以下述べる。まず松本平の高年層に関して見る。次に長野県全体について、若年層の状況を見る。

3. 松本平方言の否定形

上に見たように松本平は -ナイ(-ネー)の地域である。以下にまず松本平方言本来の否定形について述べる。これは筆者の内省に基づいて述べる。次に4人の言語資料提供者の資料に基づいて、現在の使用状況を見る。その人たちの言語背景は次のとおりである。

筆者 1947年生 男 居住歴：生~22歳 東筑摩郡朝日村、22歳~25歳 長野市、25歳~42歳 東京都足立区、42歳~44歳 長崎県西彼杵郡長与町、44歳~ 松本市 職歴：25歳~ 教員

A氏 1943年生 男 居住歴：生~18歳 東筑摩郡朝日村、18歳~20歳 東京都杉並区、20歳~23歳 長野市、23歳~ 東筑摩郡朝日村 職歴：18歳~59歳 会社員、59歳~ 自営業

B氏 1950年生 女 居住歴：生~20歳 松本市、20歳~ 東筑摩郡朝日村 職歴：18歳~52歳 会社員、52歳~ 自営業手伝い

C氏 1942年生 男 居住歴：生~ 松本市 職歴：18歳~ 会社員のち取締役

D氏 1946年生 女 居住歴：生~ 松本市 職歴：18歳~24歳 会社員、24歳~ 自営

A氏と筆者の出身地である東筑摩郡朝日村は、松本市に隣接している。B氏・C氏・D氏の出身地は現在は松本市であるが、いずれも1954年まで東筑摩郡寿村だった所である。またA氏とB氏、C氏とD氏は夫婦である。

松本平方言の動詞の否定形 /neE/ の活用は表1のごとくである。これは筆者が生～22歳（1947年～69年）に身に付けたそのままであり、その後の変化は受けていないものである。

表1

語幹 \ 活用形	(1) 連用形1	(2) 終止連体形	(3) 仮定形	(4) 連用形2
n	aku	eE	ak aker	aN
後続形式	naru	終止 koto zura ra	ja	de da zura

簡単に注釈を付ける。動詞「読む」に続く形を例にして述べる。

(1) 連用形1 /'jomanaku/ は共通語と同じ形である。

(2) 終止連体形は /'jomaneE/ となる。これは終わりを短く /'jomane/ とすることもある。その後に /zura/ /ra/ を付けた /'jomaneEzura/ /'jomaneEra/ は、どちらも共通語のヨマナイダローの意味である。

(3) 仮定形は /'jomanakja/ /'jomanakerja/ となるが、これは当地以外でもよく行われる言い方である。両形の中で、当地では /'jomanakja/ の方が優勢である。

(4) 連用形2の /'jomanaNde/ は共通語のヨマナクテとヨマナイデの両方に相当する。共通語のヨマナクテとヨマナイデには意味の違いがあるが、当地の方言ではそれを区別しないことになる。/'jomanaNda/ は共通語のヨマナカッタに相当する。/naNde/ と /naNda/ の関係は、ナ行・マ行・バ行の五段動詞におけるテ形とタ形、例えば /'joNde/ と /'joNda/ の関係と同じである。/'jomanaNzura/ は共通語のヨマナカッタダローの意味である。それと同じ意味では /'jomanaNda/ の後に /zura/ を付け /'jomanaNdazura/ とも言う。なお同じ意味で /ra/ を後続させて /'jomanaNdara/ と言うことはない。

共通語の -ナイには未然形 -ナカロがある。それは現在ではほとんど使用されない形である。その活用形は「読む」ではヨマナカローとして使われるが、それに対応する形は当地の方言にはない。

共通語との対応を表にしておくくと表2のようになる。

表 2

松本平方言	ヨマナク	ヨマネー	ヨマナキヤ ヨマナケリヤ	ヨマナンデ		ヨマナンダ
共通語	ヨマナク	ヨマナイ	ヨマナケレバ	ヨマナクテ	ヨマナイデ	ヨマナカッタ

4. 高年層に対する調査結果

当地での動詞否定形の現在の使用状況を調べるために、上記の4氏に協力いただいて調査を行った。その調査は2003年10月に行った。まず家庭内での会話を録音した。次に-ンの使用に関して面接調査を行った。調査した順とは逆になるが、-ンの使用についての面接調査結果から先に述べる。

表 3

動詞の種類	動 詞	ン形	A氏	B氏	C氏	D氏
子音型動詞	行く	イカン	○	○	○	○
	書く	カカン	○	○	○	○
	寄越す	ヨコサン	○	○	×	○
	飲む	ノマン	○	○	×	×
	読む	ヨマン	○	○	○	○
	受かる	ウカラン	○	○	○	○
	帰る	カエラン	○	○	×	×
	知る	シラン	○	○	○	○
	治る	ナオラン	○	○	×	×
	分かる	ワカラン	○	○	×	○
	買う	カワン	○	○	×	×
母音型動詞	見る	ミン	○	○	×	×
	遅れる	オクレン	○	○	×	×
	食べる	タベン	○	○	○	○
	出る	デン	○	○	×	×
	行ける	イケン	○	○	×	○
	いる(おる)	オラン	○	○	×	×
カ変動詞	来る	コン	○	○	×	×
サ変動詞	する	セン	×	×	×	×
常套句	…かもしれない	…カモシレン	○	○	×	○
	…といけない	…トイケン	○	○	×	×
		…トイカン	○	○	×	×

4. 1 -ンの使用確認

まず-ンを言うかどうか。いくつかの動詞について確認した結果が表3であり、そこに示したとおり、個人差はあるが4氏とも言うという結果である。ただしその使用は「よく考えてみると言っている」という程度のものであり、頻繁に使っているというほどではないという回答である。次にどのような場合に言うか。これについては、どのような人を相手とする場合か、またどんな場面か、いろいろ想定して考えてもらったが、4氏とも、親しい人

との間でのうち解けた会話のときに言うということである。

次に -ンのどういう形を言うか。4氏とも終止連体の用法のヨマン、ダベン等は言うが、それ以外の形で言うことはないようである。

各動詞について使用を確認した結果が表3である。-ンの接続した形を「ン形」と呼んでおくことにする。○は言う、×は言わないである。

A氏とB氏は、セン以外はすべて言うという結果である。C氏は言うのは少しのみである。D氏はC氏よりも言うものが多く、調査した動詞のほぼ半分である。

以上、-ンに関して、人により多い少ないの違いがあり、また使用は頻繁というほどでないものの、4氏全員が言うということ、また言うのは終止連体の用法のみであることが確認できた。

4. 2 会話に現れた否定形

次に4氏の家庭での会話の録音に基づいて、否定形の使用状況について述べる。この調査ではA・B氏宅とC・D氏宅において家庭内での会話を録音した。録音時間はA・B氏宅、573分、C・D氏宅、29分である。会話の有無にかかわらず録音機を回してある場合もあり、また4氏以外の会話も録音に入っているため、4氏の会話は全体の録音時間の一部分である。その録音から動詞の否定形が使われているものをすべて取り出した。方言形・共通語形共に出現している。また -ンも出現している。例を挙げる。

キレ (切れ) ナク ナッチャウト オモ (思う) ガ
ドッカ (どこか) カリ (借り) ナイト
ドナルカ キーテ (聞いて) ミナキャ ワカラ (分から) ネナ
ソバモ ウタ (打た) ナケリヤ
ウケ (受け) ナンデモ イーデ
コロバ (転ば) ナカッタ
ミンナ シラ (知ら) ナンダダカ
ヨバレ (呼ばれ) テナクタッテ
ソーユ ワケニワ イカンゾ

これらを活用形ごとに分け、出現回数を集計した。活用形は基本的に表2に従うが、それに -ンを加える。会話には ヨバレ (呼ばれ) テナクタッテ のように -ナクタッテ が出現している。これは共通語であり、当地の方言でそれに相当するものは -ナンデモ であるが、表2のように分類した場合、-ナクタッテ という形は入るべき適当な場所がない。そのためそれは別に集計する。会話に出現した中には ヨク ワカン (分かん) ナイケド などのようなものがある。その言い方は共通語ではないが、-ナイ のみに注目して、他の共通語のものと一緒に集計する。この集計を表にしたのが表4である。左に共通語形、右に方言形を並べてある。ただし -ナクタッテ は表に入れなくて、表外に注記した。松本方言本来の方言形と共通語形の出現数を比べるために、その集計も付した。A・B氏宅とC・

D氏宅では録音時間に差があり、出現数はその長短に応じている。

表 4

		A氏		B氏		C氏		D氏	
-ナク		4		2		0		0	
-ナイ / -ネー / -ン		12 / 72 / 7		112 / 1 / 7		5 / 6 / 0		11 / 2 / 3	
-ナケレバ /	-ナキャ -ナケリャ	0 / 30 0		0 / 18 1		0 / 2 0		0 / 2 0	
-ナクテ -ナイデ	/ -ナンデ	0 / 6 0		0 / 12 0		0 / 1 0		0 / 0 0	
-ナカッタ / -ナンダ		2 / 5		18 / 3		0 / 0		1 / 0	
-ナクを除く共通語形	両形計	14	127	130	165	5	14	12	16
-ナク -ンを除く方言形		113		35		9		4	

※上記以外に -ナクタツテがあるが、表に入れない。B氏が4回言っている。

4. 3 それぞれの否定形

それぞれの項目の使用状況について見る。-ナクは共通語形と同形なので、特に述べない。

4. 3. 1 -ナイ/ -ネー

A氏(男)は方言形である -ネーが圧倒的に多い。-ナイ、-ネーの合計に対する -ネーの割合は 85.7%である。それに対しB氏(女)は -ネーは1回の使用しかなく、-ナイがほぼ全部となっている。-ネーの割合を出すとは 0.9%である。C氏(男)とD氏(女)の -ネーの割合は、C氏(男) 54.5%、D氏(女) 15.4%であり、この2人の間でもD氏(女)の方が -ネーが少ない。これは女性の方が共通語化しやすいという全国的傾向と同じ傾向の中に、この人たちもあるということであろう。この調査は家庭内の会話についてであり、公的場面のものではない。にもかかわらず -ナイ/ -ネー の対立についてはこのように共通語化しているわけである。

4. 3. 2 -ナケレバ/ -ナキャ・ -ナケリャ

これについては -ナケレバは全然出現していない。-ナキャ・ -ナケリャは共通語でないとはいえ全国的に多く使われているものである。その反映がこの人たちにもあるためか、-ナキャ・ -ナケリャの使用のみである。-ナケリャについてはB氏(女)が1回のみ言っている。当地では -ナキャの方が優勢である。-ナケリャは辛うじて1回録音されたわけである。

4. 3. 3 -ナクテ・ -ナイデ/ -ナンデ

これについては -ナクテ・ -ナイデは全然出現していない。-ナンデは男女を問わず強い勢力を持っている。-ナンデは -ナンダと関連ある形式であるが、-ナンダと比べても使

用率が高い。ただしB氏（女）は -ナンデモに相当する共通語の一形式である -ナクタッテを4回使っているので、その点では部分的に共通語化していると言える。

4. 3. 4 -ナカッタ/ -ナンダ

これはどちらも出現しているが、A氏（男）は -ナンダの方が高率であり、71.4%、B氏（女）は -ナカッタの方が圧倒的であり、-ナンダの割合は 14.3%である。これは -ナンデの状況とは全く違っている。（どうしてか。ここでは理由は考えずに指摘のみに留どめる）

4. 3. 5 方言形と共通語形の率

ここまでで -ナクと -ンを除いたものの合計について、割合を出す。当地本来の方言形のみについて見るため、-ナクと -ンを除く。表4の最下段にその数値が示してある。それに基づき方言形の全体に占める割合を出すと、次のようになる。A氏（男）89.0%、B氏（女）21.2%、C氏（男）64.3%、D氏（女）25.0%である。男性の方が方言形の使用率が圧倒的に高いということが見て取れる。それに対し女性は方言形の使用率が低い。

4. 3. 6 -ン

まず、これが出現しているものを全部挙げる。

A氏（男）

- (1) ワルクチ（悪口）ダケワ イワ（言わ）ンヨーニ
- (2) アサ（朝）カモ シレンナ
- (3) タオシテ（倒して）カナキャ イケンデサ
- (4) デテ（出て）ルカモ シレンデ
- (5) ミスオ スルデ イケンダヨ
- (6) カントク（監督）デナキャ イカンダ
- (7) ツツン（包ん）ジマヤ イケンゾヤイ

B氏（女）

- (8) ソーユー ワケニ イカンゾ
- (9) カク（書く）ワケニ イカンデネ
- (10) イーヤッテ ワケニ イカンデ
- (11) ドーゴモ ナランモンネ
- (12) ソノ マエ（前）ノ ジーチャンワ シラ（知ら）ンヨ
- (13) イツ シン（死ん）ダカ シラ（知ら）ンケド
- (14) カエル（替える）ワケニ イカンシ

D氏（女）

- (15) オチャ（お茶）ワ ウルサイカ シレンケド

(16) シャケン (車検) ワ ナッタ コト ナイデ シラ (知ら) ン

(17) ナンダカ ヨク ワカラ (分から) ンダ

これらを見ると、-カモ シレン、ワケニ イカン などの常套句が多い。常套句で出現しているものと使用者・文番号を表にすると表5のようになる。17例中の 11例が常套句である。

表5

	A氏	B氏	D氏
-カ(モ) シレン	(2) (4)		(15)
-ナキャ イケン	(3)		
-ナキャ イカン	(6)		
(~スレバ) イケン	(7)		
ワケニ イカン		(8) (9) (10) (14)	
ドーニモ ナラン		(11)	

A氏とB氏とでこのように差が現れた。それぞれの個人により、使用が習慣化しているようである。これら以外の使用は、A氏、イワン、イケン、B氏、シラン (2回)、D氏、シラン、ワカラン である。この中に シラン が3回ある。また シラン と意味が近い ワカラン がある。特定の動詞によく使われる傾向があると言えるかもしれない。

以上、4氏の -ンの使用について見た。

5. 若年層に対する数量調査

5. 1 調査の概要と集計方法

次に若年層に対する数量調査に基づいて、長野県全般での -ンと -ナンダについて見る。(ネカッタについても少しだけ触れる) この調査は1995年から1997年にかけて行ったものである。学生や社会人を対象として行っており、調査当時30歳以上だった人もいるが、以下においては1997年4月1日現在、18歳~30歳の人たちのものを資料とする。居住歴に関して、対象として適当とするのは、13歳前後~18歳前後を同一の地域で過ごした人とする。

この調査は、「読む」「見る」の2つの動詞について、次のものを日常的に言うかどうか問うものであった。

/ 'jomanai/ / 'jomaneE/ / 'jomaN/ / 'jomanaNda/ / 'jomanekaQta/
/minai/ /mineE/ /miN/ /minaNda/ /minekaQta/

この内 -ナイ、-ネーについては以下の考察からはずす。この調査は自分の方言としてそれを言うかどうか確認する形で行われたのではなく、ただ日常的に言うかどうかを問うものであった。教育を受けた若い人たちが -ナイを言わないということはほとんど考えられない。だからこの調査の結果で -ナイの使用地域を考えても無意味である。-ネーにつ

いても良い結果が期待できない。それで以下の考察ではこの資料は使わない。-ン、-ナンダ、-ネカッタについてのみ、見ることにする。

以下に市町村（2002年時点の区画）ごとの調査数と、「言う」という回答の数を集計する。男女については分けて集計すべきであるが、今回、資料数不十分を理由に、まとめて集計する。以下の集計では、市町村ごとの数は分かるが、特定の個人がどの項目に「言う」と回答しているかまでは分からないという不都合がある。それも今回は不問とする。

次にヨマン、ミン、ヨマンダ、ミナダについて、「言う」の集計を表6に示す。ヨマネカッタ、ミネカッタについては「言う」という回答が非常に少ないので、別扱いで後で述べる。県内の市町村をすべて表に載せる。並べ方は、まず郡部を先に載せ、その後以前にその郡に属した市を載せる。ただし北信地方は郡境を越えて合併しているので、そのとおりにならない所がある。中信地方と南信地方は-ナイと-ンの境界線に基づいて2つに分ける。中信地方（1）、南信地方（1）は-ナイ、中信地方（2）、南信地方（2）は-ンの地域である。表の中に調査数が0の所もある。それは未調査もしくは適当な資料が得られなかった所である。

5. 2 各項目の結果

5. 2. 1 ヨマン・ミン

表6によると、本来-ンの地域である中信地方（2）と南信地方（2）は、-ンの使用率が非常に高い。100%の市町村が多い。若年層でもこのような高率を示しているわけである。100%になっていないのは次の市町村である。榎川村、木曾福島町、山口村、辰野町、伊那市、駒ヶ根市。その中では、榎川村がヨマンは100%であるのに、ミンは調査数3に対し0、辰野町が調査数5に対しヨマン4、ミン2であり、ミンが特に低い。両町村とも-ナイの地域である塩尻市（旧東筑摩郡）に隣接している。それがその低率という結果と関係あることが推測できる。（前述の国立国語研究所（1991）では、辰野町の調査地点は-ネーになっている）

本来の-ナイの地域にも-ンが散見する。高山村は調査数2に対しヨマン、ミンともに2である。高山村が特に高くなる理由があるのかどうかは分からない。

使用率を広い地域の中で見ると、一定の区域に区切った中でそれぞれの使用率を出してみる。表7のように区切って考えた。その区域での調査数、ヨマン、ミンそれぞれの数と、両方合わせた数、使用率を示す。両方についての使用率の計算は、両方の合計を調査数の2倍で割ったものである。

表 6

		ヨマン	ミン	ヨマナダ	ミナダ	調査数			ヨマン	ミン	ヨマナダ	ミナダ	調査数
北信地方													
下水内郡	栄村	—				0	東筑摩郡	安曇村	1	0	3	3	3
	豊田村	0	0	0	0	1	坂井村	—					
飯山市		0	0	0	0	3	麻績村	0	0	2	2	2	
下高井郡	野沢温泉村	0	0	0	0	1	坂北村	0	0	1	1	2	
	木島平村	0	0	0	0	1	本城村	1	0	2	2	2	
	山ノ内町	0	0	0	0	1	生坂村	0	0	2	2	2	
中野市		0	0	0	0	3	明科町	0	0	0	1	3	
上高井郡	高山村	2	2	0	0	2	四賀村	0	0	2	2	3	
	小布施町	0	0	0	0	1	波田町	0	1	4	4	4	
須坂市		0	0	0	0	2	山形村	2	0	1	1	2	
上水内郡	信濃町	1	1	0	0	2	朝日村	2	0	2	2	2	
	三水村	1	1	0	0	1	松本市	5	4	9	8	12	
	豊野町	0	0	0	0	1	塩尻市	0	0	3	3	4	
	牟礼村	—				0	南信地方 (1)						
	戸隠村	—				0	諏訪郡	下諏訪町	1	0	3	3	3
	鬼無里村	0	0	1	1	1	原村	—					
	中条村	—				0	富士見町	—					
	小川村	1	1	0	0	3	岡谷市	2	1	3	3	3	
	信州新町	0	0	2	2	3	諏訪市	—					
長野市		8	9	3	3	33	茅野市	—					
埴科郡	坂城町	—				0	中信地方 (2)						
更級郡	戸倉町	1	0	0	0	1	南安曇郡	奈川村	3	3	3	3	3
	上山田町	0	0	0	0	3	木曾郡	榑川村	3	0	0	0	3
更埴市	大岡村	0	1	1	1	3		木祖村	2	2	2	2	2
		0	0	0	0	1		開田村	3	3	3	3	3
東信地方								日義村	3	3	3	3	3
小泉郡	真田町	0	0	0	0	1		木曾福島町	3	2	3	2	3
	東部町	0	0	0	0	3		三岳村	3	3	1	2	3
	青木村	0	0	0	0	3		王滝村	3	3	1	1	3
	丸子町	0	0	0	0	4		上松町	4	4	3	3	4
	武石村	0	0	0	0	4		大桑村	4	3	2	2	3
	和田村	0	0	0	0	3		南木曾町	3	3	3	3	3
	長門町	0	0	1	1	4		山口村	3	2	2	2	3
上田市		2	1	1	1	3	南信地方 (2)						
北佐久郡	軽井沢町	—				0	上伊那郡	辰野町	4	2	2	4	5
	御代田町	—				0		箕輪町	2	2	2	1	2
	北御牧村	0	0	0	0	1		南箕輪村	—				0
	浅科村	—				0		高遠町	2	2	2	2	2
	望月町	—				0		長谷村	—				0
	立科町	0	0	0	0	4		宮田村	—				0
小諸市		1	1	0	0	1		飯島町	1	1	1	1	1
佐久市		1	1	0	0	2		中川村	—				0
南佐久郡	臼田町	—				0	伊那市	3	2	1	1	3	
	佐久町	0	0	0	0	1	駒ヶ根市	1	2	1	1	2	
	八千穂村	1	1	0	0	1	下伊那郡	—				0	
	小海町	—				0		松川町	—				0
	北相木村	—				0		高森町	1	1	0	0	1
	南相木村	—				0		豊丘村	—				0
	南牧村	—				0		大鹿村	—				0
	川上村	—				0		喬木村	1	1	1	1	1
中信地方 (1)								上村	—				0
北安曇郡	小谷村	0	0	0	0	3		清内路村	2	2	2	2	2
	白馬村	0	0	1	1	6		阿智村	—				0
	美麻村	2	0	3	3	3		浪合村	1	1	0	0	1
	八坂村	0	0	3	3	3		下條村	—				0
	池田町	2	1	5	5	5		泰阜村	—				0
	松川村	—				0		南信濃村	—				0
大町市		1	1	5	5	5		天龍村	—				0
南安曇郡	穂高町	1	0	2	2	4		阿南町	—				0
	豊科町	1	0	2	3	4		平谷村	2	2	2	2	2
	堀金村	1	1	3	3	3		壳木村	—				0
	三郷村	2	0	4	4	4		根羽村	2	2	1	1	2
	梓川村	3	0	2	3	4	飯田市	1	1	0	0	1	

表 7

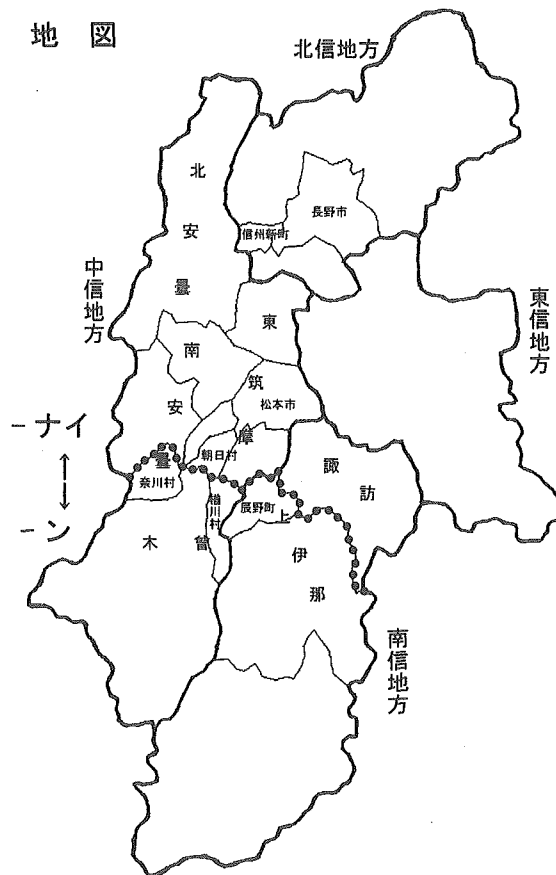
	調査数	ヨマン		ミン		両方	
北信地方	67	14	20.9%	15	22.4%	29	21.6%
東信地方	35	5	14.3%	4	11.4%	9	12.9%
旧北安曇郡	25	5	20.0%	2	8.0%	7	14.0%
南安曇郡(奈川村を除く)	22	9	40.9%	1	4.5%	10	22.7%
旧東筑摩郡	38	8	21.1%	5	13.2%	13	17.1%
旧諏訪郡	6	3	50.0%	1	16.7%	4	33.3%
以上(-ナイの地域全体)の計	193	44	22.8%	28	14.5%	72	18.7%
長野市を除く北信地方	34	6	17.6%	6	17.6%	12	17.6%
長野市と高山村を除く北信地方	32	4	12.5%	4	12.5%	8	12.5%
松本市を除く旧東筑摩郡	26	3	11.5%	1	3.8%	4	7.7%
長野市	33	8	24.2%	9	27.3%	17	25.8%
松本市	12	5	41.7%	4	33.3%	9	37.5%

この表から次のことが言える。

ヨマンとミンを比べると同程度の使用率である地域も多いが、極端にヨマンの方が高い地域もある。旧諏訪郡と南安曇郡(奈川村を除く)でヨマンの使用率は特に高い。その両地域ではミンの回答は1つのみである。両地域ではヨマンとミン両方を合わせた率でも比較的高率となっているが、それはヨマンの高率に依っている。-ナイの地域全体として見ても、ヨマンが高率である。

北信地方では高山村が特に高率であり、次に長野市は調査数も多く使用率も比較的高いが、両市村を除いて集計すると北信地方は低率になる。旧東筑摩郡から松本市を除いて集計した場合は、極端に低率となる。このように一定地域の中で特定の市町村のみが高率ということがある。その地域ではそれ以外の市町村では低率だということである。

長野県としては大都市である長野市と松本市はともに高率であり、またそれぞれのヨマンとミンの比率は同程度である。都市部の方が-ンを



受け入れやすいと考えてよいかもしれない。両市の中では松本市の方が高率である。松本市からそれほど遠くない南は -ンの地域であるが、-ンの浸透の勢いを受けていると想像できようか。

5. 2. 2 ヨマナンダ・ミナンダ

-ナンダについて馬瀬（2003）は次のように述べている。「西日本方言的特徴のナンダの分布は、ンと比べて広く、中・南信地方を覆うほか、それと接する北信・東信の、それぞれ、一部にも進出する」馬瀬（1992）にも同様の記述があり、同書には「見なかった」の言語地図を載せている。

国立国語研究所（1999）は、前出の国立国語研究所（1991）と同じ調査に基づいたものであるが、「行かなかった」についての調査結果を示している。その結果は馬瀬（1992）、馬瀬（2003）を裏付けるものとなっている。

筆者の調査は若年層に対するものであるが、馬瀬（2003）、国立国語研究所（1999）と同様の結果とすることができる。表6でヨマナンダ、ミナンダとも、中信地方・南信地方は高率となっている。中には0の市町村もあるが、全体的に見て高率である。ただし北端にある小谷村が0、その南の白馬村が調査数6に対してヨマナンダ、ミナンダどちらも1のみであり、中信地方の北端の両村がこのように低いことは注目される。しかしこれだけの限られた調査では何とも言えない。北信地方・東信地方は極端に低率である。ヨマナンダ、ミナンダとも各市町村で同じ結果となっているが、鬼無里村、信州新町、長野市、大岡村、長門町、上田市に、合わせて9あるだけである。（馬瀬（1992）では、鬼無里村鬼無里で-ナンダを使用することが指摘されている）その中で信州新町は調査数3に対して2と、高率であるが、同町は中信地方に接している町である。

以上、この調査は、若年層における状況が、馬瀬（2003）に述べられたのと同じであることを確認するものとなった。

5. 2. 3 ヨマネカッタ・ミネカッタ

これについては「言う」という回答が非常に少なかった。使う人がわずかながらいるということは確認できたが、この資料ではそれ以上の考察はできない。参考のために「言う」全部について市町村と数を挙げておく。この結果を記すに留どめる。

	豊田村	飯山市	高山村	信濃町	長野市	長門町	美麻村	朝日村	飯田市
ヨマネカッタ	1	1	1	1	3	0	1	0	1
ミネカッタ	1	1	0	1	2	1	1	1	1

6. おわりに

以上、調査を通じて、松本平の高年層が -ンを言うことが確認できた。ただしそれほど

多く使うわけではなく、また常套句や特定の動詞に片寄って使う傾向があるらしいことが分かった。普通の会話での動詞否定形全般の使用について見ると、男性は方言形が優勢、女性は共通語形が優勢というはっきりした結果が出たが、-ナキャ、-ナンデのように、女性も方言形が主流というものがあることが分かった。

若年層に対する数量調査では、ヨマン、ミンの使用に関して、-ナイと -ンの境界線を境にしてはっきりとした違いが出た。-ナイの地域におけるヨマンとミンは、所により使用率にいろいろ違いがあること、また -ナイの地域の中で松本市は、ヨマン、ミンの使用が多い方であることが分かった。

この調査を通じて、当地の否定形の使用状況の一端を見ることができたと言えよう。

注

牛山 (1969) 4 ページから、この境界線について述べた全文を抜き出すと次とおりである。「以上 ない ん (ぬ) の純粹に用いられる限界について見て来たのであるが、このない、ん (ぬ) 両系の境界線を設定するならば、北は新潟県の中蒲原、東蒲原の西境より福島、群馬と新潟の県境を経て長野、新潟の県境に沿い、下って長野県北安曇、南安曇、東筑摩、諏訪の西境を経て山梨県に入り東山梨、東八代、南都留、静岡県富士、庵原の西境を連ねる線をもつてない、ん (ぬ) の境界線とすることが出来るであろう」

文献

- | | | |
|---------|------|-------------------|
| 馬瀬 良雄 | 2003 | 『信州のことば』 |
| 国立国語研究所 | 1999 | 『方言文法全国地図』 4 |
| 馬瀬 良雄 | 1992 | 『長野県史 方言編』 |
| 国立国語研究所 | 1991 | 『方言文法全国地図』 2 |
| 飯豊 毅一他 | 1983 | 『講座方言学 6 中部地方の方言』 |
| 馬瀬 良雄 | 1971 | 『信州の方言』 |
| 牛山 初男 | 1969 | 『東西方言の境界』 |

